

これからの25年、
京都のまちづくりにあたって
大切にしたい思想・価値観

はじめに

未来共創チームでは、複数回の会議を通じて、
「**私たち未来共創チームのメンバーが**
大切にしている・共鳴する価値観はなにか？」
を議論してきました。

この資料は、その議論をもとに、長期ビジョン策定にあたって
考慮してほしい思想・価値観や、盛り込んでほしい要素をまとめたものです。

なお、これからの京都を考えるにあたっては、行政や学識者といった一部の意見のみならず、**次代を担う若い世代はもちろん、子ども、子育て世代、外国人など京都に関わる様々な方の意見にも思いを馳せていただきたいと思います。**

目 次

- 1 弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく・・・4,5ページ**
 - ・ 薄くつながる人々や人以外とも関係性を創り、彼らも京都のまちを創っていく主体として捉えてもいいのではないか
- 2 京都市民に解釈・行動を委ねる“無計画さ”や“余白”も大切・・・6,7ページ**
 - ・ 自ら考え、行動していくためには、多様な価値観を認め合い、それを受け止める「余白」がビジョンから感じられると良いのではないか
- 3 脱成長・脱競争の社会へ。ベストだけでなくベターも認める・・・8,9ページ**
 - ・ 高いよりも程よく、速いよりも丁寧に、完成よりも未完・終わりがなく、競うよりもそれぞれの時に混ざりあう、といった一元的ではない目線を持つことが必要ではないか
- 4 誰もが“育む・支える”まなざしを持つ・・・・・・・・・・・・・・10,11ページ**
 - ・ ビジョンでは、特にこれからを生きる若者、子どもたちや弱い立場の人の視点が大切ではないか
- 5 超長期目線で考える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12,13ページ**
 - ・ 未来は今と過去の積み重ねであり、1000年前から紡がれてきた京都独自の価値観に立ち戻ることが大切なのではないか。

1 弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく

京都は、灰汁の強い奇人・変人が多いが、まちのひとは彼らを微笑ましく見ていて、それも人の関わりの1つとして捉えている。京都のまちの価値とは、そうした居住や、利害関係の有無を超えた人と人のつながりや、それによって形成される網の目の細かさ、その豊かさである。

そうした多層的なつながりのあるすべての方々とつながりの濃淡に応じた多様な関係性を創っていき、ビジョンの主体（0.1の権利/プライドを持つ市民）として捉えることで、京都を愛してもらうことにつながるのではないか。

さらに、京都は自然との関わり方もユニークであるため、人だけでなく、動植物、機械やAIなどもつながりの対象の一つとして捉え、それらと一体となったまちづくりを模索しても良いのではないか。

<委員の思い>

薄くつながっている人も、ある種の主体として捉えた方がよい。現在は、基本的には住んでいる人が1つ権利を持っており、住んでいない人は全く権利を持っていないが、そこをもう少し滑らかに、0.01だけ権利を持つ人がいてもよいのではないか

動植物や人間、機械、AIとも渾然一体ということを目指し得るのではないか。やはり京都には自然に対する非常にユニークな感性があり、自然と人間は、お互いがお互いを支配し使うような関係ではない。今後の世界において、AIなどの新しい知性に対しても、同様に使う、使われるだけではない関係性を構築できるのではないか

「京都を愛する人が」を主語にしてはという意見があったが、少しロマンチックなワードがすごくいいと思った。「京都を愛する、そしてこれから愛していくであろう人が」というふうに、未来に広げていくこともできるし、あるいは「京都を愛し、そして愛していくものが」でも良い。鴨川や山々が京都を愛しているか分からないが、人間以外となると苔も山もみんな含まれるかもしれない

人間以外のアクターも入れるべきで、これからの都市を考えていく上で、人間だけではなく、植生や自然、動物や微生物など、「マルチ・スピーシーズ・モア・ザン・ヒューマン」のようなコンセプトも加味した都市のデザインを考えていけるとよい

京都のまちの価値とは、人と人の繋がりや、それによって形成される網の目そのものであり、その豊かさ。どんな形であれ、自分がその網の目の一部としてあるという事実を感じられたり、可視化できたり、そこに貢献することができる仕組みや考え方を打ち出すことはできないか

0.1という単位は「1の存在を認識し、且つ1よりも小さい単位」であるとともに、昨今の「2.0」「3.0」といった成長型に対するカウンター的な概念のようにも思われ、原点を見つめ直すよい概念ではないか

京都で暮らしているが、京都市民と自信を持って主張できないというところが本音である。ただ、京都を好きかどうか、愛しているかどうかという、愛している自信はある。それを考えると、やはりこの愛のグラデーションというところは、あまり問わないほうがいいのではないか

働き方や生き方が多様化する中で、京都への関わり方も多様化する。これまでも多様な主体の営みによって京都というまちが紡がれてきた歴史も考慮し、これからは市民の概念を広げ、その範囲をどう定義するかが重要な論点となる。また、市民税を払う「住人」以外の人々がどのように京都に関わり、税を納める形態（観光税やふるさと納税など）をどのように整えるかも議論すべきである。京都に関わるすべての人々が行政サービスを支える可能性があるため、この点も考慮する必要がある。

京都の人は洛中や洛外という考えがあり、私は山科出身なので、それこそ京都の人ではないという認識がある。そういうものも含めて京都らしさだとは思いますが、私自身の状況も重ねると、「京都を愛する人」というくくりはすごく素敵

京都に関係する人、住む人みんなが自分の役割を理解したうえで、他者に対して礼節を尽くすこと。礼節を尽くしたうえで、協調、協力しながら、愛をもってみんなで京都をつくっていくことが求められる。誰一人無駄な人はいないので、自己を卑下することなく、他者を軽んじることなく、京都をつくるものの一人として共生することができればいいかなと思う

2 京都市民に解釈・行動を委ねる、“無計画さ”や“余白”も大切

京都は、人が有機的に結びつきをつくりだしてきたまち。だからこそ、今の課題とその解決方法に対する全員の合意が取りにくくなっている時代において、計画という「ゴール」をデザインするのではなく、どうすれば多様な主体が動き出せるかという「スタート」をデザインすることが、重要なのではないか。

また、ひとりひとりに解釈があり、一つのビジョンでだれもが納得する解釈を打ち出すことは難しい。多様な価値観を認め合い、それを受け止めるだけの「余白」が、ビジョンから感じられると良いのではないか。

<委員の思い>

地図を作るよりもコンパスを持つ方がいい。ゴールに向かうときに、方位磁針を見ながら、軌道修正しながらたどり着けるというやり方がある。現代では地図を描けないのではないかと思うので、なんとなく目安を見ながら進むほうがいい

「社会課題」と個々人が「課題」だと捉えることの間には、それぞれの経験や実情に応じて少しずつズレができる。そのズレを尊重する時代では、大きな「合意」を得て全員が何か行動を変えるということが難しい。計画という終わりをデザインするのではなく、どうすれば多様な主体が動き出せるかという始まりをいかにデザインするか、そうした身体の動かし方をいかにして身につけるかが重要ではないか

京都を愛する人たちが有機的に動くには、Howの提示ではなく、自分たちでどうすればいいのかを考える余白のある状態を作る必要があるのでは。したがって、ビジョンで示すのはHowではない。共通して目指すビジョン（≡コンパス）が必要。そのビジョンで表現するものは、受け手によって解釈余地があり、時間にとらわれずにゆったりと考えられるものが良いのではないか

自分にとって真に確からしいと感じられるもののみを残し、それを余白のある中で鑑賞者や相手に投げかけること。それは、他者の多義的な解釈を認める余地を与えるという意味で、矛盾を内包していると言える。つまり、余白があるということはある種、他者各々の矛盾や多義を許容するのと同じではないか

ボトムアップで作られるのが京都らしいという点では、市民の巻き込み方、市民のエネルギーの包容力も含めていただきたい。市民側のコミットメントをどう作るのかにもつながる

一人一人に答えがある。京都市民の私はこう考える！みたいな。0.1市民だからここまでは貢献したいとか、0.8の人もこうしたいなどの私的なアンサーを引き出したい

ルールや制度は道具に過ぎないはずだが、それを盲目的に従うことで柔軟性を失い、個人の裁量や創造性が制限され、「できない理由」が先行する場面が増えている。コントロール不能な事象が多い現代では、計画的なまちづくりでは対応が困難であるため、ぶれや余白を許容し、多様な主体に委ねる柔軟なまちづくりへの転換が必要である。そのためには、小規模で実験的なプロジェクトが自然発生する環境を整え、実験エリアや部署を設置し、多様な主体が参加できる場を創造する必要がある、1つの成功事例を横展開するこれまでのやり方ではなく、あくまでもN=1として、それぞれのケースに柔軟に対応することが求められる。

3 脱成長・脱競争の社会へ。ベストだけでなくベターも認める

日本では人口が減少し、世界では資源の枯渇や資本主義の限界などが議論される今、すべてを拡大・成長方向で考えるのではなく、場合によっては、ひとりひとりが豊かで幸せであるために、**新しいものを付け加えていく発想ではなく、今あるものをどう活用するか、再配分するか、また現状をいかに楽しむかを考えることも必要**ではないか。

また、一元的な価値観（＝ベスト）にあわせるのではなく、**高いよりも程よく、速いよりも丁寧**に、**完成よりも未完・終わりがなく、競うよりもそれぞれの時に混ざりあう**、といった一元的ではない目線を持つことが、世界文化自由都市を宣言している京都のまちには**必要**ではないか。

<委員の思い>

自分の周りの若い世代は「自分サイズの幸せ」を追求する傾向が強い。暗いニュースや「終わりに向かう日本」というイメージの中で育ち、国や社会に対して絶望感を抱く者が多いと感じられる。政治や社会の責任を「若い世代は政治に関心がない」と押し付けられる場面も多々見られる。そのため国やインフラに依存せず、自分たちで幸せを見つけようとする姿勢が見られるのではないだろうか。「強い日本」という概念は過去の物語として、成長や競争を重視する価値観よりも、「脱成長」や自分らしい生き方を目指す世界観を持つ若者も増えている。

京都は「世界を意識して作り上げる都市」ではなく、「京都らしさを追求する都市」であるべきだと感じる。世界を意識して町づくりを進めると、先進都市に見られるような高層ビルや無個性な街並み、近未来的なインフラといった「均一化された景色」に近づいてしまう可能性がある。京都らしさの追及の結果、京都のスタンスや独自性、文化的価値が世界中の人々に愛され、大切にされるまちとなるのが京都にあったまちづくりだと感じる。

世界の相対性のなかで京都を考えるのか、京都の現状から考えるべきなのか

町家の保存においても、完璧なものを残して横にコンビニという世界観ではなく、なんとなくベターで数を増やしていくことが大事

ベストを目指すことはつまり、それ以外はNOになっている。完璧な1以外はダメなものになってしまうと焦りに繋がる。違いを認め合うとか、一旦ベターでとりあえずいいんじゃないか。やりながら直しながら自分のペースで進んでゆけばよいのではないかと、自分自身にも、まちや相手に対してもそう思えるかどうかがとても大事。ベストを目指すと同じまちにの姿になっていく。

「100%のものを1%残す」ことと「70%のものを30%残す」ことは対立構造ではなく、100%ではないものを数多く残せるような方向性も必要。例えば茶室だと、文化財に該当する茶室部分を100%で遺せたとして、水屋などの併設部分が置き去りになると100%での活用はできない側面もある。「遺跡として残す意味」と「活用を前提として残す意味」の2点を踏まえてほしい。その観点でいけばそれぞれにベターの意味は変わってくると思う。

あくまで主観であるが、現在の京都は保護に力を入れている印象がある。すべて一括りに残そうとするのではなく、定数であり続けるべきところは定数のまま残し、変数として変わり続けなくてはいけないところは変えていく。そういった境界をしっかりと考え、見極めていきたい

4 誰もが“育む・支える”まなざしを持つ

世界の都市は、偉い人、教養のある人といったいわゆる社会的強者（≡男性的目線）により、“生産力”を重視して作られている。しかしながら、コロナ禍を通じて、子育てや福祉をはじめ、さらには仕事など私たちの社会を構成する網の目を維持するために必要な「育む・支えるケア」を備えていることの重要性が明らかになった。

そのためにもビジョンでは、特にこれから生きる若者、子どもたちや弱い立場の人の視点も入れる必要があるのではないか。

社会的強者が”正しい”まちづくりないし政治活動を行うという旧来のまちや国の在り方の転換点なのでは。これまでのマッチョ的な世界観に不足していたのはケアや弱い立場（とされてきた者たち）の視点。具体的には、女性、老人、障がい者、子供など。

ケアは子育てに限らず、私たちの社会を構成する網の目を維持するための重要な労働。ケアを考えることは仕事を考えることとイコール。ケア及び仕事というものを再定位することは、これからの都市を大きく変えるものであり、ひいては京都がどういうまちなのかを考えるうえで避けては通れないように思う

人口減少という割には、子育ての機会や場の視点が欠けている気がする

特に京都は生まれてから大人になるまで、どの年代でも生きた文化に地続きで触れられる機会が多いと思う。しかしながら、特に幼児期の子どもたちやその保護者が参加できる機会や環境は乏しい。そこに空白期が生じることで他人事になる。それは担い手の不足につながる話だと思う

京都で大学生時代を過ごしたあと離れていく人が多いのはもったいない。京都を「学ぶ場所」から「暮らす場所」へと見方を変えてもらうために、みんなで支え合いながら子育てや福祉、さらには仕事をケアしていく空気づくりが重要。

5 超長期目線で考える

京都は1000年を超える歴史があるまち。その歴史の分だけ、過去の参照点がたくさんあるところが、他のまちにはない大きな強み。未来は今と過去の積み重ねであり、1000年前から紡がれてきた京都独自の価値観に立ち戻ることが大切なのではないか。

そうすることで、25年や100年ではなく、もっと先の、1000年先の未来を見据えることにもつながるのではないか。

京都の千年の歴史は他の都市にない。まちの中にも何百年のものが
あり、文化も千年前から語られる。京都こそ、参照点があるから先を
考えられる。

一旦、2050年、25年後というのを忘れて、それこそ100年
や1000年という単位で、私たちがどう京都を愛し続け、愛され続
けたいのかを考えてもいいのでは。

悠久の歴史に、その時々の子きた人々の歩みにいつでも私たちが立
ち戻れることがとても意義あることであって、どのような未来を描い
て、時に歩んできた道を省みるようなタイミングがあったときに、常
に過去と照らしてフラットなポジションに帰ることができることが京
都の大きな強みだと思う。いつでも私たちが過去に参照点を持ちそれ
と自分自身を相対化できるという歴史観が流れていると、過去を意味
あるものとして今のビジョンに包含できるのではないかな。

超長期的な視点を考える上で重要なのは「過去を振り返ること」で
ある。未来は予測できないため、過去に目を向けることで人間が人間
であり続ける限り失われないものが見えてくる。個人的には、それは
「衣食住」と「遊び」に集約されると考える。前者は生きるために必
要な基盤であり、後者は幸せで豊かな生活に不可欠な要素である。も
し「遊び」がなければ、生きる意味や価値が失われるのではないかな。

私たちができることは常に、過去を参照することと今日に向き合うことだけ。今から1000年「先」の未来を見据えるということも重要な視
点だが、1000年「前」から今という超長期目線に立てる都市というのは稀有である。その立場で考えることは必然的に1000年「先」を見据
えることではないかな。その上で、必要なタイミングで重要な参照点を見いだせるかどうかという点にはテクニックが必要だと思うので、公民
連携のネットワーク構築も重要